

飯塚 浩二 著

『満蒙紀行』

筑摩書房 1972年 295ページ

I

本書は、故飯塚浩二氏が敗戦直前の1945年2月から6月にかけて中国東北（満州）と東部内蒙古地方を踏査したときの旅行記録である。本書のもとになったのは、戦後著者がこの旅行時の詳細なフィールド・ノートを整理しながら、東大東洋文化研究所紀要に分割して発表した7篇の論文である。しかし本書はたんなる論文集ではなく、下記の篇別構成にみられるように、7篇の原載論文が著者の旅程に合わせて日記風の紀行として整理しなおされており、また最初の発表の際には省略されていた北京滞在の部分も著者のノートから原稿として加えられており、本書を完全な旅行記録とするためのゆきとどいた配慮がなされている。

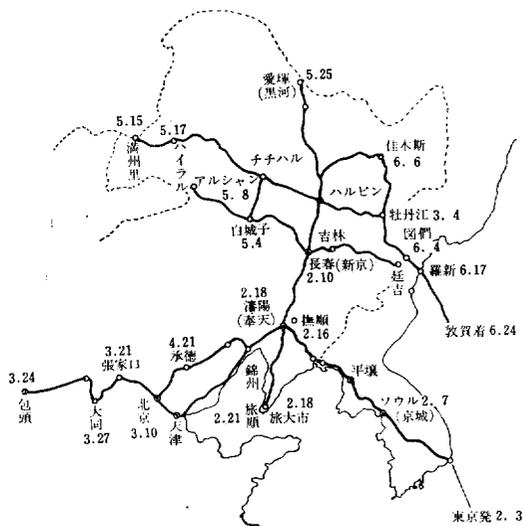
- I 戦争末年の南満州における経済事情と労務管理
(原載・東洋文化研究所紀要、第32冊)
- II 北満における白系露人の入植地ロマノフカについての所見(同上、40冊)
- III 戦争末期の蒙疆(同上、35冊)
- IV 戦争末期における熱河および興安地区(同上、38冊)
- V ダライノールとホロンバイル(同上、4冊)
- VI 戦争末期における北満(同上、42冊)
- VII 「牧民官」の姿勢、危機と仕える人の健気さ(同上、43冊)

ところで私は、かつて本誌(第12巻第4号)に発表した小論『『満州』研究の現状と課題』において、本書の原載諸論文が崩壊期「満州国」の実情を伝える貴重な記録であることに注目し、「いずれも敗戦直前の満州の表情を生々しく伝えるとともに、崩壊に瀕した『満州国』経営の具体的内容について示唆に富む問題を数多く指摘している」と書いた。しかしいま、あらためて本書を通読して、本書が私の上記のような視角からの読み方だけでは全く不十分な、より深く豊富な内容をもっていることを痛感させられた。本書の解題で古島和雄氏は、「この旅行記は、太平洋戦争末期の日本の植民政策の実態を記

録するという意味にだけとどまらない内容と視角をもっている」(293ページ)と指摘し、さらに「この書は、飯塚教授の鋭い比較文化論的なメスで、日本と日本人の本質的な在り方を、分析しつくさされているように思われる」(294ページ)と述べておられるが、私も本書を読んで、古島氏のこの指摘に全く同感である。しかも、このことは、崩壊に瀕して、あらゆる矛盾を露呈するにいたった日本の満州支配と占領地行政の実態を、1社会学者の鋭い目で冷静に観察した唯一の記録としての本書の価値を増すものであれ、いささかも減ずることにはならないだろう。そこで私は、植民史研究にたずさわる研究者の立場から、ここでは主に、「満州国」における植民地支配の実態を解明する上で本書がわれわれに何を示唆し、どのような問題を提起しているか、あるいは今後の植民史研究について本書から何を学ぶべきか、といった視点から紙数の許すかぎり本書の内容を具体的にあとづけることにしたい。

II

まず最初に、本書にしたがって著者の全旅程を地図の上にとどてみると、別図のようになる。これを一瞥しただけでも、著者が当時の困難な状況の中で短期間のうちにいかに精力的に中国大陸の要地を踏査したかに一驚を禁じえないが、それ以上に私が注目したいことは、著者が日本の敗戦を予知し、その直前の決定的な歴史的時点をえらんで大陸旅行を敢行した動機と、そこにみられる強烈な問題意識、ないしは研究意欲である。著者は、



(注) 数字は最初に到着下車の日付。

つぎのように書いている。

「私が大陸旅行の準備にとりかかったころには、あらゆる指標は『斬り死に覚悟』のその日が差し迫りつつあることを示していた。内地の有様がそうである以上、日本の植民地支配下の『外地』や占領行政下の中国に“修学旅行”を試みるとすれば、まさに『いまのうち』だったのである。それに日本の戦力にまだ余裕があった段階で訪れたのでは、権力支配と宣撫工作の一応の成功に蔽われて、行きずりの一介の旅行者には到底観察できなかったような事柄も、情勢がここまで煮つまったいまなら、こちらがうっかりしていても、いわば向うから、あれやこれやわれわれの耳目に迫ってくる。この点では、最後の大陸旅行のチャンスは、当然またと望めない見聞の機会になるはずであった。」(5ページ)

本書の全篇にみながっている克明な観察と、あらゆる見聞を直ちに自己の学問の糧としてやまない食欲なまでの学究的精神は、まさに著者のこのような問題意識に支えられていたのであり、それはまた、この長途の旅行に示された著者の旺盛な行動力の源泉ともなっていたといえることができる。

こうして本書は、戦争末期の中国の植民地社会にたいして学問的な考察を加えた高度の学術的記録となっているのであるが、それと同時に本書は、旅行中に著者の目に映じた中国大陸のめづらしい風物やまた著者の接した数多くの現地日本人や中国人、ロシア人、モンゴル人などの個々の人物像をその社会的背景の中で生き生きと描写しており、しかもそこに一貫して著者の暖かいヒューマニズムが脈うっているのであって、本書が、1個のすぐれた紀行文学となっていることもあわせて指摘しておきたい。

III

さて本書は、前述のように戦争末期の「満州国」と占領地の実態を様々な角度から克明に観察し、記録しているが、その中で著者がつねに興味の焦点においていたのは、まず現地の経済事情、とりわけ労働事情や労務管理の問題であろう。これらの問題について本書は、安東地区の密輸の状況、満州の原棉問題、華北のインフレ、統制経済のあり方など、当時の植民地経済の実態を知る上で多くの参考になる資料を提供している。たとえば、「満州国」の統制経済の実態にふれて、著者は、「統制経済の抜け穴は、経済警察の手のとどかない、経済統制や経

済警察の元締より一枚上のあたり、いわば雲の上の方においている」(38ページ)ことを指摘し、それと関連して一つの興味あるエピソードを紹介している。それは、関東州経済会の理事長の話で、かれが在留日本人の消費生活の窮乏を同州の軍司令部に訴えたところ、「君たちが頭を働かせないからいかんのだ。われわれを見給え、ちっとも物資の不足などに困らされておらん」とのご託宣に二の句がつけなかった、というのである。(40ページ)

また撫順炭砒を訪れた著者は、そこで華北の物価高による労働事情の急激な悪化にたいしてとられた中国人労働者の行政供出の実態を調べ、その就労期間は6カ月で、収入はわずか200円くらいにしかならず、「動員される満人側の立場からいえば、要するに、他律的な強制にすぎない」(22ページ)こと、またこの行政供出とともに撫順の労働力構成の一環をなす勤勞奉公隊について、彼らが「しばしば反抗し、質の悪い妨害をする」のも、「もともと稼ぎたくて来たわけではない、“勤奉”の名における徴用だからである」(23ページ)という。ここには戦争末期における労働力の強制徴発とその矛盾が端的に示されている。

さらに著者は、撫順の労働者が全部「満系」であることについて、次のような興味ある指摘を行なっている。「全部満系というのは、韓人といっしょにすると両者間の喧嘩が絶えないからだということであった。ただし、植民地社会特有のゆがめられた民族感情の対立によるもので、満系はおれたちは独立国の国民だ、何だお前の方は……と嫌がらせをいうというような具合に、彼らが日系から受ける抑圧感を半島出身者に八ツ当りすることでまぎらわしているとみるべき現象のようである」(23ページ)。「満州国」が建国の理念として常に謳いあげていた「五族協和」とは、そもそも何であったか、それを示す一つの実例をここにみる事ができよう。

ところで、当時の労働事情の悪化は、日本の占領地域に共通する問題であった。それについて著者は、つぎのような注目すべきエピソードを紹介している。その一つは、著者が北京に向う車中で同乗の北票炭砒の常務から聞いた話として、北票では労働力確保の対策が炭砒周辺に中国人を定着させる郷村建設の方向にまで進められていること、そしてそこでは、より広い問題として、当時の切迫した時局が「いまこそ満人に、血縁・地縁の枠を超えた社会性を訓練すべき絶好のチャンスである。(中略)またそうわれわれは導かねばならぬ」(72ページ)という形で受けとめられていることを紹介した上で、著者

は、この常務に限らず、「満州国をしゃぶりに来たのではない人々、満州国建設に夢を託していた人々が、あの局面に臨んで自分達の役割を歴史的にどのように位置づけようとしていたかを伝える生の資料として読まれたい」（72ページ）と付言している。

本書には、このほかにも「満州国」で活動した多くの「善意」の日本人が、著者の共感とともに登場するが、植民地支配という全構造の中でこれらの日本人とその活動をどのように評価すべきかは、たいへん困難な問題である。本書は、その判断を多く読者に委ねているようであるが、問題の所在については示唆するところが多いのである。

いま一つの興味あるエピソードは、張家口の蒙疆電業の例で、労務供出によって攤派（供出を免がれた者が支払う代償）がたんまりもらえるため、「会社で使う苦力などがそっちへ行くので、手不足になって困る」（92ページ）こと、しかもそこでの農民は日本側と八路軍側の双方から人員供出、糧食供出を要求される立場におかれていたが、「かつて日本側が村長、屯長の会議を召集したところ、一人も来ない。妙だと思ったら、同じ日に八路側でも召集していて、皆そちらへ出席していたということであった。ここにすでに大勢の帰趨を読みとることができるわけだが、このごろでは交戦があると農村の人人は、こっちへ逃げて来ず、八路の陣地の方へ逃走する傾向があるという。」（92ページ）

労働力の問題とともに、著者が注目しているのは、いわゆる把头制の問題である。撫順炭砒における把头制のあり方をつぶさに観察した著者は、会社が「科学的」な労務管理よりも、「これを遺して利用する方が得策であり、合理的でさえあったのである。『治める者は治められる者によって規定される』という原理がここに貫徹される」（24～25ページ）ことを指摘し、さらに「かねがね“科学的管理”に近づけることを方針としてきたという撫順炭砒としても、あらためて把头制度の長所を見直し、さらに大把頭制に期待をかけざるを得ないように仕向けられているというのが、私が訪れた戦争末年における実情であった」（25ページ）とのべ、日本の植民地労働政策が戦時体制のもとで前近代的な労務管理方式への依存をいっそう強めざるをえなかった矛盾を浮き彫りにしているのである。この把头制について著者は、さらに大連の埠頭荷役における苦力頭制度や三泰油房についてその仕組みを具体的に紹介しているが、このうち埠頭荷役について著者は、「人夫の統制、広くいって労務管理

の方式を大把頭制、小把头制、科学的管理の三つに分類すれば、埠頭局がとっているのは、第二の方式であり、埠頭荷役の人夫を一括供給している福昌華工は大把頭格であり、苦力頭は小把头の地位にある」（31ページ）と指摘する。さらに興味深いのは、この福昌華工の経営する有名な碧山荘の状況が、その内部にたちいってきわめて詳細に記録されていることである。このように本書は、当時日本の支配下におかれていた中国人労働者の状態を知る上で実に豊富な資料を提起しているばかりでなく、日本の植民地労働政策の実態についても、注目すべき多くの問題を提示しているのである。

IV

つぎに、著者が植民地における民衆支配、あるいは日本人植民者と現地住民との関係をどのように観察し、いかなる問題を指摘しているかについてみよう。

まず、ソウルに大陸旅行の第一歩を踏んだ著者は、はやくもそこで友人Rの話から創氏などについて次のような興味あるエピソードを紹介している。「鴨緑江を越えての密輸に、朝鮮風の名前だと税関の検査がうるさい、日本人名だと通りやすい。そこで、この時局に日・鮮一体だから、われわれも日本式の姓名をもちたいという形で話が持ちこまれると、総督の方では単純至極にこれを“皇民化”運動の成功としてとらえる。朝鮮の人々の気持もそこまで来たかと悦に入って、創氏のお触れを出す。同様に、朝鮮人の学校にもご真影を奉安させたいという運動の火元は写真屋。国民服普及運動のスポンサーは洋服屋の組合……といった按配で、……」（6ページ）。なお、ここで著者はラテン語の諺 *Stultum facit fortuna quem vult perdere*（運命はそれが亡ぼそうと欲した人をおろかにする）を引いているが、この諺に含意されるものが、旅行中の著者の念頭に一貫してあったことに注目しておきたい。

ついで「満州国」の問題として、著者は建国直後に組織された協和会の概略を述べ、「撫順では、協和会は日系にとっては一つの道義的責任であり、財政的負担だが、満人社会に対する寄与、就中、治安の確立に役立っていることを再認識する必要がある、というのが、ここの管理職（つまり日系）の大体一致した意見であった」（26ページ）ことを紹介し、「これがコロニアリスト一流のヒューマンズムであることは、ここにわざわざ指摘するまでもないだろう」と述べている。協和会が現地の日本人によって主に治安確保の視点から評価されていたことは、

協和会の本質を理解する上で十分に示唆的である。なお「満州国国民といっても、満州の人々には戸籍がない。協和会の会員になるのは戸主だが、協和会の名簿には家族も記載されるので、この名簿が戸籍の役をするのだという」(26ページ)のは、たいへん興味深い。戦時体制の勤労働員や国策遂行に協和会が重要な役割を果たしたが、その際、この名簿がいわば住民台帳として大きくものをいったであろうことが容易に理解できるからである。

また日本の内蒙支配について、著者がバインクーレンのある包に地元有力者を訪ねて、チンギス汗廟について質問する下りでの「民族英雄」論は、教えられるところが多い。著者によれば、「チンギス汗に熱をあげているのは、当のモンゴルより日本人、しかも日本人の独り相撲たるの懸念は多分にあった。満州国時代の日本人は、いわゆる蒙系統御の方策として、さらには外蒙モンゴルへの呼びかけとしての効果をさえ私かに期待しながら、興安地区の空高く『民族英雄チンギス汗』のアドヴァールンを挙げた。そして事実、本気になって『蒙系』の面倒をみるという打ちこみ方をしていた日系の軍人や官吏も何人かはいたように思う。」(223ページ)。そして著者は、「今日の事態を持ってあましたり絶望したりすると『民族』英雄を古いところへ探しにゆくのは、近代の——多分、西洋でも絶対王政時代以後の社会心理学的通則のようである。このばあいのも、チンギス汗廟のばあいのも、何の目的のために『民族英雄』が作り出されたかの方が本当の問題であるだろう」(224ページ)と、含蓄ある指摘をしているのである。

朝鮮の創氏の話といい、チンギス汗廟の話といい、日本の植民政策にみられた愚かさについて、本書は実に多くの事例を提示していて、私の興味はつきないが、そのような愚かさを人格的にもっともよく体现していたのは、やはり関東軍の軍人に多かったようである。著者の実見ただけでも、ハイラルに向う車中で酔態を誇示した関東軍参謀らや、中国人の車掌に不正乗車を咎められて逆に居直った関東軍の経理将校の例など、当時の植民地における日本軍人の尊大振りを髣髴とさせている。著者はいう。「肝腎の関東軍は、誰もが指摘するように、自己の絶対権力の故に、建軍わずか10年にして、威張るほかに能のないほどたるんでしまっていた。関東軍首脳がやがて八月にあの醜態を暴露するほど(中略)芯から腐っているとは、気がつかなかったけれども、絶対権力の上にあぐらをかいた者の腐敗現象についてなら、すでに多過ぎるデータを、満州にまで来て蒐集・補足するに

はおよばない。」(39ページ)と。

V

このような植民地の権力支配の腐敗にたいして、とくにきわだったコントラストをなしているのは、本書の終篇『牧民官』の姿勢、危機と仕える人の健気さに登場する“阿城の岸さん”こと岸要五郎氏のような存在である。著者は岸氏の阿城街民食自給圏の設定などの業績を詳しく紹介しながら、「実質上軍政下にあるに等しい満州国の地方行政の枠内で、彼が副県長の権限に残されていた臨機裁量の余地を生かすことに“牧民官”としての存在理由を賭け得るタイプの人物であつたらしいのは、この際、彼ひとりの仕合せではなかったはずである」(256ページ)、さらに述べて「解放前の満州国では、無告の民に対する牧民官の立場において、少なくとも県の規模でならこれだけのことはやれるという政治を、阿城県副県長岸要五郎氏はやりとげてみせた。われわれは大同学院出身者のホープといわれた人物の治績をそのように理解していいのだと思う。」(260ページ)しかし同時に著者は、「満州国の日系官吏が時にきわめて進歩的な考えを抱きながら、その意図を実現し得ないこと、彼らが折に触れて、協和会は、ソ連の党の方式を真似ながら、仏作って魂入れずです、などと自嘲することなど、いずれも満州国というものの基本的な性格から規定された悲劇である」(263ページ)と指摘することを忘れてはいないのである。

それでは最後に、著者はこの旅行を通じて、「満州国」の植民地支配をどのようにとらえていたのであろうか。著者は、友人の華北の炭坑技師が最も信頼していた部下の中国人技師が、「あに図らんや、八路が潜入させていた幹部要員だったという」話(52~53ページ)や、旅行中再三聞かされた、「“匪賊”の逮捕にしる、闇の取締にしる、満人は一体どういう手段で情報伝達をやるのか、出動する警官が裏をかかれなかったためしはない……など不思議がる日本人同士の会話」(53ページ)を紹介したあとに、述べて、「周知のように、中国で日本が占領しているのは、点と線だけだといわれていた。この指摘は、満州国なるものがこの世に存在した全期間を通じて中国側の失地回復のプログラムの筆頭に位していた東北地区にも、程度の差こそあれ、当てはまる」(53ページ)といい、さらに、「点と線だけの占領にしる、つねに日本軍の直接の武力行使を必要とし、抗日ゲリラとの協力、ゲリラへの参加が住民の目の関心事だった長城以南と

ちがって、長城以北の中国では、われわれ日本人があからさまに真相を思い知らされる機会は多くなかった。表面にあらわれた問題としては、勤奉隊の満系青年の反抗分子が悩みの種、地方によっては確かに八路の工作員の活動が治安警察の悩みの種だという程度のところで、そもそも満州国を存在させた全機構の方からさきに崩れてしまったということだと思われる。」(53ページ)と、きわめて示唆に富む指摘を行なっていることに私はとくに注目したい。

以上、本書について私のさし当てる問題関心から重

要だと思われることを摘記してきたが、それは本書の豊富な内容のごく一部にすぎず、著者のロマノフカ見学記をはじめ、紅帮・青帮の組織、帝政ロシアの植民政策との対比、日本の開拓政策への批判等、触れるべくして触れえなかった多くの問題があるが、すでに紙数はつきたので、本書がさまざまな関心をもつ読者の知的要求に十二分にこたえてくれる、実に味わいのある書物であることを強調して、筆をおくこととする。

(徳島大学教授 鈴木隆史)

調査研究双書

アジア経済研究所刊行

高梨博昭編

フィリピンの金融事情

410頁 2000円

フィリピンの金融制度について、その背景と発達の歴史を概観し、各種金融機関の実態、金融政策、為替管理、開発のための資金調達機構などにつき、できるだけ網羅的に解説し、それぞれの特質について明らかにする。

山本秀夫・野間清編

中国農村革命の展開

400頁 2000円

本書は、1920年から60年代を軸として、農村社会構造の把握、農民革命・土地革命の特質、集団化の必然性、諸矛盾の展開とその解決、人民公社と所有制の問題等、新進気鋭のきめ細かい論文で構成されている。

斎藤一夫編

台湾の農業上・下

各 1800円

戦後急激に復興した台湾経済の歴史的経過をふまえ、その背後で着実・健全に発展した「模範生」台湾農業の、現時点における問題点・矛盾点を分析、究明し、国際的位置づけの中で台湾農業を総合的にとらえる。

南亮三郎編

韓国人口の経済分析

240頁 1700円

可能な限り古い時代の人口記録まで遡り、韓国人口の増加趨勢や増加パターンを明らかにしながら、朝鮮動乱の災害から立ち直り1962年からの5カ年計画以後の経済成長のかげに潜む幾多の経済的・社会的問題をえぐりだす

アジア経済出版会発売